

観光資源と文化

■観光資源

徳島の観光地としては、雄大な渦潮で知られる鳴門海峡のほか、県西部にある西日本第2の高峰剣山つるぎさんや峡谷の美しい大歩危おおほけ・小歩危こほけ、日本の原風景といわれる秘境祖谷い やなどが挙げられる。県南部には、絶景スポットが点在する蒲生田岬やウミガメの産卵で知られる大浜海岸などがある。さらに、徳島市の徳島城跡(旧徳島城表御殿庭園)やシンボルである眉山びざん、美馬市脇町にある豪勢な藍商の面影を残す「うだつの町並み」などがよく知られている。

一方、旅先を選ぶうえで重要な動機となる「食」の魅力は、すだち、なると金時、鳴門わかめ、鳴門鯛、レンコン、阿波尾鶏といった食材が徳島のうまいものとして人気がある。全国区の知名度を確立している徳島ラーメンに加え、たらいうどんや祖谷そば、半田そうめん、鳴ちゆるうどんなるの「麺」も有名である。地元のソウルフードでは、豆天玉焼き(小海老の天ぷらと甘く煮た金時豆の入ったお好み焼き)や竹ちくわ、フィッシュカツ、大野海苔などが好評を得ている。2022年には、県内18番目の道の駅「道の駅くるくるなと」が鳴門市にオープンした。地元食材を生かしたグルメの提供に加え、巨大な特産品のオブジェによるフォトスポットが設けられ、体験型の「食のテーマパーク」として人気を集めている。

■文化

○阿波おどり

阿波おどりは「日本三大盆踊り」に数えられ、400年を超える歴史を持つ伝統芸能である。人々の暮らしに根つき、時代ごとの変化を巧みに取り入れながら継承・洗練されてきたその踊りは、国内外から訪れる人々を魅了し続けている。

阿波おどりには男踊りと女踊りがあり、「鳴り物」と称される三味線、太鼓、鉦かね、横笛による二拍子の伴奏のもと、踊り手の集団である「連れん」が、「ヤットサー」という掛け声をかけながら街中を踊り歩く。連とは踊りのグループであり、有名連、企業連、大学連など、大小様々なものが存在している。阿波おどりは県内各地で開催されるが、中でも徳島市の阿波おどりは最も規模が大きく、街中で踊る8月12～15日の4日間は普段静かな街が熱く変貌する。5月頃からあちこちで行われる踊りの練習風景も街の風物詩となっている。

眉山の麓にある阿波おどり会館では、年間を通じて踊りの実演が行われている。観客も一緒になって踊ることで、本場ならではのエンターテインメントを楽しむことができる。

○阿波人形浄瑠璃

人形浄瑠璃ぎだうぶしは、義太夫節で物語を語る太夫と三味線、3人遣いの人形によって演じられる人形芝

居のことである。徳島県の人形浄瑠璃は、農村舞台と呼ばれる神社の境内に建てられた専用の野外劇場に合わせた独自の演出や頭の大形化などの特徴を持ち、「阿波人形浄瑠璃」として国の重要無形民俗文化財に指定されている。

阿波人形浄瑠璃の絶頂期は明治中頃で、年間400～500回の公演が行われていたといわれている。著名な人形師である初代天狗屋久吉^{てんぐ ひさきち}の注文帳には、当時県内で70以上の人形座が活動していたことが記録されている。

代表的な演目に、父母を探して巡礼の旅に出た娘お鶴の悲しい物語「傾城阿波鳴門」^{けいせいあわのなると}がある。お鶴の父のモデルとなった人物、板東十郎兵衛の屋敷跡である徳島県立阿波十郎兵衛屋敷(徳島市川内町)で定期公演が行われている。

農村舞台は、県内に全国最多の88棟(2014年3月時点)が残されており、そのうち10棟前後の舞台では人形浄瑠璃の公演が今も行われている。また、いくつかの人形座は活動を復活させ、古い伝統を守りつつ新たな工夫を重ねている。

○阿波藍

吉野川流域は、洪水の影響で米作は困難であるが、肥沃な沖積平野を形成していたことから、鎌倉時代から藍の栽培が行われてきた。江戸時代になると、藩主である蜂須賀公から奨励され、染料としての「阿波藍」の生産が増加した。阿波藍はその品質の高さから「本藍」と呼ばれ、木綿の普及により拡大した全国の染料市場を席卷し地元莫大な富をもたらした。藍商人は隆盛を極め、彼らからの上納金は徳島藩の有力な財源となった。特産品であったたばこや塩などで得た利益を合算すると、石高の25万石余に匹敵するほどであったといわれている。また、藍商人たちの活躍は阿波おどりや人形浄瑠璃などの文化の発展にも貢献した。

ドイツから化学染料の輸入が増加するにつれ、国産藍は1903(明治36)年をピークに衰退期に入ったが、近年では天然染料の良さが再び見直されている。2021年に開催された東京オリンピック・パラリンピックでは、「ジャパンプルー」として公式エンブレムに藍色が採用された。

○大谷焼

大谷焼は徳島を代表する陶器で、江戸時代後期に四国八十八ヶ所霊場を訪れた豊後の国(大分県)の焼き物細工師・文右衛門が大谷村(鳴門市大麻町大谷)で蟹ヶ谷の赤土で作ったものが起源とされる。大物陶器が一つの特徴で、人が入れるほどの巨大な甕は、大谷焼独自の製法「寝ろくろ」によって作られる。陶器を焼く登り窯の大きさは日本一といわれる。大甕は、藍染めに用いる藍甕や薬品を入れる容器として数多く生産されたが、藍染めの衰退やほうろう容器の出現に伴い生産量は減少した。最近では、湯呑みや茶碗、皿などの実用品やインテリア製品などが多く作られている。

大谷焼は2003年9月に国の伝統的工芸品に指定されたほか、徳島県の伝統的特産品の認定も

受けた。現在でも6軒の窯元が作陶を続けており、毎年11月には窯元合同の陶器市「大谷焼窯まつり」が開催されている。

○四国遍路とおもてなし文化

四国遍路は、弘法大師・空海が開創したと伝えられる八十八の札所を巡礼する独特の文化である。1200年以上、幾多の人々の厚い信仰によって守り継がれてきた。俗塵を離れ、ときに人との触れ合いに感動しながら、大自然の中で生かされている自分自身を見つめ直す旅である。全長約1400kmに及ぶ巡礼路は、世界的にも稀な円環型となっている。

日本人の宗教離れ、レジャーの多様化、大型バス旅行から個人旅行へのシフトが進み、日本人遍路は減少傾向をたどっている。一方で、外国人歩き遍路が急増しており、その普遍的な価値が見直されつつある。長い年月を通じて育まれた地元の人々の「お接待」は、四国が世界に誇る生活文化として息づいている。

○大塚国際美術館

大塚国際美術館は、瀬戸内海国立公園の鳴門公園内に位置し、大塚グループの創業75周年事業として1998年に開館した。延床面積2万9,412㎡に及ぶ日本最大級の常設展示スペースを有する世界初の「陶板名画美術館」で、古代壁画から現代絵画まで1,000余点の原寸大の陶板画を展示し、居ながらにして世界26ヵ国、190余の美術館巡りが体験できる施設となっている。ミケランジェロの「システィーナ礼拝堂天井画」(ヴァチカン)やゴッホが描いた「ヒマワリ」全7点を再現するなど、世界に類がない唯一の美術館として年間数十万人が訪れている。2018年のNHK「紅白歌合戦」では、シンガーソングライターの米津玄師氏(徳島市出身)が館内のシスティーナ・ホールから生放送で出演し、大きな反響を呼んだ。同美術館は、世界最大の旅行口コミサイト「トリップアドバイザー」が発表する「トラベラーズチョイス」に15年連続で選出されるなど、人気の施設となっている。

○故 瀬戸内寂聴 氏

徳島が生んだ大作家。1922年5月、徳島市幸町で生まれる。徳島県立高等女学校(現:城東高校)、東京女子大学卒業。「新潮同人雑誌賞(女子大生・曲愛令)」(1957年)を皮切りに、「女流文学賞(夏の終り)」「谷崎潤一郎賞(花に問え)」「野間文芸賞(場所)」「泉鏡花賞(風景)」など多くの文学賞を受賞。1998年に「現代語訳 源氏物語」を完結(全20巻)させた。2006年には文化勲章を受章した。

1973年に岩手県平泉町の中尊寺で得道し「寂聴」を僧名とする(それまでは「瀬戸内晴美」として活躍)。1974年には京都嵯峨野に「曼陀羅山 寂庵」を開いた。「徳島県立文学書道館」(2002年10月開館)の設立に尽力し、2004年から10年間館長を務めた。2021年11月、100歳を目前に死去。

○西祖谷の^{じんだいおどり}神代 踊

祖谷のかずら橋がある三好市西祖谷山村で1100年以上受け継がれてきた伝統の踊り。888年、当時讃岐守だった菅原道真が干ばつで苦しむ農民のために行った雨乞い祈願の踊りが起源とされる。2022年11月、国連教育科学文化機関(ユネスコ)の無形文化遺産への登録が決まった24都府県41件の民俗芸能「^{ふうりゅうおどり}風流踊」の一つ。

踊りは、住民らが獅子や^{てんぐ}天狗、花がさの衣装を身に着けて輪を作り、太鼓や^{かね}鉦の音に合わせて、男性はなぎなたを模した棒を振りかざして勇壮に、女性は扇子を手に優雅に舞う。旧暦6月25日に善徳地区の善徳天満宮で、旧暦9月11日頃に徳善地区の有宮神社で、地元保存会によって奉納されている。

保存会の会員は1976年の発足当時から減少し、大半が60代以上と高齢化が進む。踊りを保存継承していくための踊り手の確保が課題となっている。

○徳島を舞台とした映像作品

徳島県内を舞台とした映画では、板東俘虜収容所でのドイツ兵捕虜と地元住民の心の交流を描いた「バルトの楽園」(2006年)、さだまさし氏の人気小説を映画化した「眉山」(2007年)、上勝町(株)いろどりをモデルに葉っぱビジネスを描いた「人生、いろどり」(2012年)、東京から美波町へ本社を移転した県出身者でIT会社社長の吉田基晴氏をモデルにした「波乗りオフィスへようこそ」(2019年)が挙げられる。テレビ番組では、NHK朝の連続テレビ小説「ウェルかめ」(2009年)がある。

○マチ★アソビ

“徳島をアソビ尽くす”ことを目的とした大規模複合エンターテインメントイベントで、2009年10月に「vol.1」が開催された。新町川水際公園、東新町商店街、眉山、阿波おどり会館、あわぎん眉山ロープウェイ、ポッポ街など市内各地を会場に、エンターテインメント関連企業や人気声優が一堂に集い、多彩なイベントや展示が行われる。春(5月上旬から中旬)と秋(メインイベントは10月上旬)に開催され、全国的な認知度の高まりとともに、来場者は一時10万人を超える規模まで成長した。

2020年から2022年までの間は、新型コロナウイルスの影響から「チャレンジ!マチ★アソビ」などが規模を大幅に縮小して行われたが、2023年は4年振りに本格開催された。

2024年は徳島県による補助事業の見直しで開催が見送られたが、2025年春に再開し、2026年春には「マチ★アソビ Vol.30」が過去最大規模で開催された。

(小林なずな)

スポーツ

徳島を本拠地とするプロチームには、現在サッカー、野球、バスケットボールがある。また、徳島の豊かな自然を生かし、ラフティングやサーフィンなどのアウトドアスポーツも盛んに行われている。

○徳島ヴォルティス

・運営会社：徳島ヴォルティス(株)、設立：2004年、資本金：409百万円

Jリーグ(日本プロサッカーリーグ)に加盟するプロサッカークラブ。ヴォルティスは、イタリア語で「渦」を意味する「VORTICE (ヴォルティーチェ)」から生まれた造語。大塚製薬サッカー部を前身とし、2005年よりJ2参戦。

2013年シーズンは昇格プレーオフで、2020年シーズンはJ2優勝を果たし、それぞれJ1昇格を決めた。2024年9月には設立20周年を迎えた。2026年シーズンはJ2リーグに所属している。

○徳島インディゴソックス

・運営会社：(株)パブリック・ベースボールクラブ徳島、設立：2012年、資本金：61百万円

プロ野球独立リーグ・四国アイランドリーグplusに所属するプロ野球チーム。この球団名は、藍染めや鳴門海峡をイメージした藍色(インディゴ)とメジャーリーグの伝統あるチームに命名される「ソックス」を組み合わせた造語。

2005年の「四国アイランドリーグ」発足時から加入している(現在は「四国アイランドリーグplus」)。2023年には7度目のリーグ制覇を果たした。

○徳島ガンバローズ

・運営会社：(株)がんばろう徳島、設立：2022年、資本金：1億円

2023年4月、一般社団法人ジャパン・バスケットボールリーグ(B3リーグ)から入会の承認を受けた。名前には、老若男女問わず誰にでも「頑張れ!」と応援される“徳島にあってよかった”と思われるクラブに成長していきたいとの思いが込められている。

運営会社は、メディアドウ(東証プライム市場上場、社長は本県出身の藤田恭嗣氏)が株式の67%を、残り33%は県内企業を中心に22社が出資している。

○とくしまマラソン

神戸淡路鳴門自動車道(明石海峡大橋)開通10周年記念として、2008年4月に開催。以降、春のイベントとして定着している。徳島市中心部から吉野川沿いを走るフルマラソンで、地元住民による趣向を凝らした応援や大勢のボランティアによる運営は、参加ランナーからも高い評価を得ている。

2015年大会から国際マラソン・ロードレース協会公認コースとなり、2016年大会以降は定員15,000人へと規模を拡大。なお、2020年から2022年までは新型コロナウイルスの影響により中止となった。2026年大会は定員8,500人で開催された。

○その他のスポーツ

県西部では吉野川の溪流を活かしたラフティングが盛んであり、かつて三好市に拠点を置いていたラフティング女子日本代表チーム「ザ・リバーフェイス(2024年解散)」は、国内初の世界大会として吉野川中流域で開催された「ラフティング世界選手権2017」のオープン女子(15歳以上・6人乗り)で総合優勝に輝いた。

2010年には、美馬、三好、つるぎ、東みよしを舞台に「パラグライディングアジア選手権」が日本で初めて開催されたほか、2018年には三好市池田湖でアジア初となるウェイクボードの世界大会が開催された。

光ファイバー通信網の整備、アニメ文化の浸透を背景に、2018年にeスポーツのイベントが開催された。翌年には、行政、教育機関、金融機関などで構成されたタスクフォースを母体として、(一社)日本eスポーツ連合の徳島支部を兼ねた「徳島eスポーツ協会」が設立された。2019年に、東新町商店街の空き店舗にて「とくしまeスポーツフェスティバル～闘電街～」の第1回目が開催され、約5,000人が来場した。eスポーツは、プログラミング教育や全国健康福祉祭(ねんりんピック)でも取り入れられ、県内の幅広い世代に楽しまれている。

2024年、吉野川市に日本で唯一となるオブスタクルスポーツの公認コースが開設された。ここでは、世界選手権出場の選考会も開催されている。オブスタクルスポーツは、全長100メートルのコースに設けられた12種類の障害物を乗り越え、ゴールまでのタイムを競う競技。なお、本競技は2028年ロサンゼルスオリンピックより、近代五種の正式種目として採用される。

(小林なずな)

地域課題を解決するための活動

■地域課題解決型ビジネス

地域においては、大規模災害、人口減少、高齢化、過疎化、介護、子育て、貧困、商店街の衰退、鳥獣被害など、様々な課題が顕在化している。こうした課題は、従来は行政が主に解決に当たってきたが、人的、財政的にも限界があり、単一の主体で対応していくことは困難な状況になってきている。そうした中で、地域課題の解決にビジネスとして取り組むケースが徳島県内においてもみられている【地域課題解決-1】。

地域課題解決型ビジネスの事業分野は、防災、環境保全、福祉、教育、就労支援、子育て支援、まちづくり、観光など多岐にわたる。ビジネスに取り組むのは、「地域の課題を解決したい」「地域を良くしたい」という強い思いを持つ人々である。

SDGsへの意識が高まり、消費者の間では価格や高級ブランドといった物質的な豊かさだけでなく、「社会や地域が抱える課題の解決につながる」「取り組みに共感できる」

【地域課題解決-1】地域課題解決型ビジネスの一例

企業／団体名／屋号	所在地	創業／設立年	事業内容	解決する地域課題
株式会社あわせ	美波町	2013年	地方創生プロモーション、サテライトオフィス誘致支援	人口減少・過疎化の課題解決
神山しずくプロジェクト	神山町	2013年	町内で伐採した杉を使った食器の企画、製造、販売	人工林に覆われ手入れが行き届かなくなった町内の山々の保水力の維持・再生
株式会社ハレとケデザイン舎	三好市	2014年	廃校を活用した宿泊施設、交流拠点等の運営ほか	廃校の有効活用
株式会社情熱カンパニー	阿南市	2014年	野菜、コメの生産販売	農業を通じて多様な仲間が活躍できる社会の実現
株式会社フードハブ・プロジェクト	神山町	2016年	「地産地食」をコンセプトとする農作物の生産・販売、加工品等の製造・販売、飲食・食料品店の運営ほか	農業者の高齢化、後継者不足による耕作放棄地の増加、それに伴う鳥獣害の被害などの課題解決
株式会社TABIJI ／一般社団法人旅の葉	徳島市	2017年	障がい者就労支援B型、障がい者民宿運営	障がい者が自由に旅行できない課題の解決
KITO DESIGN HOLDINGS 株式会社	那賀町	2017年	持ち株会社（子会社：櫛黄金の村（木頭ゆず生産、加工品製造販売ほか）、CAMP PARK KITO（キャンプ場運営ほか））	人口減少・過疎化の課題解決
株式会社ハビリテ	徳島市	2018年	障害児支援に特化した認可保育園、障害児通所支援施設の運営	障がい児保育が不足する課題の解決
ペット介護ステーション ジュエル ／NPO法人補助犬とくしま	徳島市	2019年	（犬の）預かりペットステーション運営	ペット犬の高齢化・介護に関する課題の解決
株式会社ミレア	藍住町	2021年	マッチングサイト運営、人材育成、自然派食品の販売・宅配、子育て支援創造スペース、オンラインショップ運営	産前・産後の母親の子育てに関する悩み事、課題の解決、育児中の母親の就労支援
WILD MEAT合同会社	美馬市	2021年	みま猟友会ジビエ部会、ジビエ専用食肉加工場の運営	害獣駆除の課題解決
株式会社Ponte	徳島市	2022年	就労継続支援A型事業所運営	障がい者の就労支援と企業の人手不足の課題解決
株式会社澄海	美波町	2023年	徳島県内水揚げ未利用魚の加工販売、水産物の養殖・販売、水産養殖技術の開発、コンサルティングほか	市場に流通しにくい未利用魚、遊休水産施設の活用

資料：各支援組織からの聴取により作成。

という観点から商品／サービスを選ぶ傾向が強まっている。徳島に進出するサテライトオフィス企業も自らの技術やノウハウを地域課題の解決に役立てようとしている。

また、こうしたビジネスを通じ、高齢者、障がい者、主婦などの就労機会創出も期待されている。

■NPO法人による活動

NPOとは「Non-Profit Organization」の略称で、様々な社会貢献活動を行い、団体の構成員に対し収益を分配することを目的としない団体の総称である。収益を目的とする事業を行うこと自体は認められるが、事業で得た収益は様々な社会貢献活動に充てることが求められる。このうち、特定非営利活動促進法に基づき法人格を取得した法人を「特定非営利活動法人（NPO法人）」という。

徳島県のNPO法人は2026年3月31日時点で370団体が認証済みである。各NPO法人の活動分野（NPO法上20の分野に限定）の構成比をみると、最近の社会的課題あるいは地域の市民ニーズを反映していることがうかがえる。全国、徳島県ともに「①保健、医療又は福祉の増進を図る活動」、「②社会教育の推進を図る活動」、「③まちづくりの推進を図る活動」、「⑬子どもの健全育成を図る活動」が上位を占めている。また徳島県においては「③まちづくりの推進を図る活動」「⑤農山漁村又は中山間地域の振興を図る活動」「⑦環境の保全を図る活動」「⑯経済活動の活性化を図る活動」などの構成比が全国を上回っている【地域課題解決-2】。

NPO法人の運営においては、ヒト・モノ・カネ・情報の不足が課題であり、特に資金の確保は安定的な活動を行う上での懸案事項となっている。徳島県においては、認定NPO法人とくしま県民活動プラザが「ゆめバンクとくしま」を運用し、県民や企業から提供される人（役務）、物品、寄付金、支援を必要とするNPO法人へとつなぎ、自立と発展を支援している。このほかインターネットを通じて不特定多数の人に資金提供を呼びかけ、趣旨に賛同した人から資金を集めるクラウドファンディングも活用されている。

徳島県は、寄付した場合に税制優遇を受けられる認定NPO法人を11団体認定している。2026年3月31日現在の認定NPO法人は、とくしま県民活動プラザ、グリーンバレー、「ふくろうの森」、スペシャルオリンピックス日本・徳島、新町川を守る会、賀川豊彦記念・鳴門友愛会、とくしまコウノトリ基金、徳島こども食堂ネットワーク、フードバンクとくしま、Approach For Life Saver、コミユナールとなっている。

○「こども食堂」の取り組み

こども食堂は、地域交流の拠点として、また食育の推進や個食の解消などを目指す取り組みとして全国で立ち上がっている。この取り組みは、2012年に東京都大田区の八百屋の

店主が、朝ごはんや晩ごはんを当たり前食べられない子どもがいることを知って自主的に始めた活動が最初とされ、その後全国へ急速に広がった。今や国民の8割以上が「子ども食堂という言葉聞いたことがある」というほど知名度が高まっている。

こども食堂は、地域住民が主体となり、無料または低価格で子どもたちや地域住民に食事を提供するコミュニティの場となっている。徳島県内では2026年4月時点で24市町村188ヶ所にて開催されている。多くは公民館や防災センターなどを活用し、頻度は年数回や週に1回などさまざまであるが、いずれの会場でも熱い思いを持つ人々によって運営されている。NPO法人徳島こども食堂ネットワークでは、こども食堂への食材などの提供、こども食堂の継続支援、新規食堂開催希望者への寄り添い支援などを行っている。

新型コロナウイルス流行下では多くが活動休止を余儀なくされたが、そうしたなかでも会食をお弁当・食材配布に変更するなど「居場所づくり」は続けられてきた。2023年に新型コロナウイルスが「第5類感染症」に移行したこと、子ども家庭庁が創設されたことなどの動きもあり、県内でも子ども食堂の数は大きく増加し、「こどもの居場所づくり」を通じた地域コミュニティが醸成されている。

【地域課題解決-2】NPO法人の活動分野別法人数と構成比（2026年3月31日現在／法人数＜徳島県＞370＜全国＞49,079）

活動分野の区分	徳島県		全 国	
	法人数	構成比	法人数	構成比
① 保健、医療又は福祉の増進を図る活動	192	51.9%	28,512	58.1%
② 社会教育の推進を図る活動	185	50.0%	25,021	51.0%
③ まちづくりの推進を図る活動	196	53.0%	22,758	46.4%
④ 観光の振興を図る活動	42	11.4%	4,485	9.1%
⑤ 農山漁村又は中山間地域の振興を図る活動	45	12.2%	3,959	8.1%
⑥ 学術、文化、芸術又はスポーツの振興を図る活動	149	40.3%	18,598	37.9%
⑦ 環境の保全を図る活動	129	34.9%	13,101	26.7%
⑧ 災害救援活動	31	8.4%	4,552	9.3%
⑨ 地域安全活動	35	9.5%	6,487	13.2%
⑩ 人権の擁護又は平和の活動の推進を図る活動	52	14.1%	9,314	19.0%
⑪ 国際協力の活動	58	15.7%	8,976	18.3%
⑫ 男女共同参画社会の形成の促進を図る活動	33	8.9%	4,898	10.0%
⑬ 子どもの健全育成を図る活動	184	49.7%	24,792	50.5%
⑭ 情報化社会の発展を図る活動	27	7.3%	4,988	10.2%
⑮ 科学技術の振興を図る活動	19	5.1%	2,700	5.5%
⑯ 経済活動の活性化を図る活動	77	20.8%	8,664	17.7%
⑰ 職業能力の開発又は雇用機会の拡充を支援する活動	89	24.1%	12,836	26.2%
⑱ 消費者の保護を図る活動	19	5.1%	2,723	5.5%
⑲ 前各号に掲げる活動を行う団体の運営又は活動に関する連絡、助言又は援助の活動	128	34.6%	23,717	48.3%
⑳ 前各号で掲げる活動に準ずる活動として都道府県又は指定都市の条例で定める活動	8	2.2%	376	0.8%

注：一つの法人が複数の活動分野の活動を行う場合があるため、構成比の合計は100%にはならない。

資料：内閣府「NPOホームページ」、徳島県 生活環境部 生活環境政策課

■地域課題解決型ビジネスの代表例

○株式会社 いろどり（上勝町／1999年4月設立）

1981年の大寒波で当時上勝町の主要農産物であったみかんが全滅。上勝町農業協同組合で営農指導員をしていた同社代表取締役の横石知二氏は、同町に適した作物は何かと試行錯誤を繰り返し、1986年につまもの（和食料理などに添える飾り）の生産、販売を行う「葉っぱビジネス」を考案し事業を開始。以後、地域住民、行政、農協が一体となって事業を推進し、第三セクターとして法人化。自然の恵みや山の資源を商品化した新ビジネスが地域の高齢者の働く場を創出し、生きがいの高揚をもたらしている。

いろどり事業はテレビや新聞で全国に数多く紹介され、農山村の活性化、過疎地でのIT活用、高齢者の生きがい高揚などのモデル事業として全国から注目を集めた。同町では、移住者の増加や高齢者医療費の減少などの効果がもたらされ、超高齢社会の手本となる要素を数多く含むビジネスモデルとされる。

同社は現在もこの分野で全国トップシェアを持つ。その強みは、日々全国から届く受発注情報を140軒以上の地元農家、同社、JA、仲卸・卸売業者の間でやり取りし、即日発送できる販売管理システムを構築しているところにある。

○株式会社 とくし丸（徳島市／2012年1月設立）

「買い物難民」と呼ばれる移動が困難な高齢者などのニーズに応えるため、提携した地域のスーパーの商品を軽トラックで玄関先まで運んで販売する徳島発の移動スーパー事業。2016年に食品宅配サービス大手のオイシックス・ラ・大地株式会社（東京都）の子会社となり、全国展開を加速させた。事業は順調に拡大し、2026年4月時点で、47都道府県において1,197台の移動スーパーが稼働している。

成長の背景には、とくし丸本部と提携スーパー、販売パートナーの3者による独自のビジネスモデルが存在する。3者のどこかに負担が偏ることなく役割分担され、売上を分け合う仕組みとなっている。とくし丸本部はブランドや運営ノウハウを提供することでロイヤルティーを得る。提携スーパーは商品を提供することで地域密着をアピールできるとともに、初期投資をかけずに新たな需要を取り込むことができる。販売パートナーは、販売委託契約を結んだスーパーで商品を軽トラックへ積み込み、巡回先で対面販売を行う。このとき、売れ残った商品はスーパーが引き取るため処分する必要がない。

商品の価格は、スーパーの販売価格より10円～20円高く設定されているが、買い物難民の高齢者にとってはスーパーまでの交通費を負担するよりも安く買い物ができる。こうした協力関係は「四方よし」をもたらしている。また販売パートナーは、地域の「御用聞き」として必要なものを届けるとともに、地域の「見守り隊」としての役割も担っている。

■NPO法人による活動の代表例

○認定NPO法人 グリーンバレー（神山町／1991年3月設立）

「日本の田舎をステキに変える！」をミッションとし、神山町を活力ある住みよい町にするための活動に取り組んでいる。国内外の芸術家が地域住民と交流しながら創作活動することを支援する「神山アーティスト・イン・レジデンス（K A I R）」事業（1999年～）、山林の整備、道路の清掃活動など多彩な活動を展開。2007年には昭和初期に人形浄瑠璃や映画でにぎわった地元の劇場「寄井座」を改修し、50年ぶりに復活させた。2008年にはK A I R 事業とは別に、国内外の芸術家にアトリエや宿舎を有償提供する「神山でアート」を開始。2010年からは若者の受け皿となる地域滞在型人材研修事業「神山塾」を開き、人材育成にも取り組んだ（2015年から事業主体が株式会社リレイションほかに移行）。このほか、IT企業などを地域に呼び込むサテライトオフィス誘致や移住定住促進事業、里山保全事業などにも取り組んでいる。2023年4月、19年ぶりの新設高専である私立「神山まると高専」の開校に当たっては、サテライトオフィス企業S a n s a n 株式会社を創業した寺田親弘社長らとともにプロジェクトに尽力した。住民主導による「創造的過疎」を目指した活動は、全国から大きな注目を集めている。

○認定NPO法人 新町川を守る会（徳島市／1990年3月設立）

“できる人が、できる時に、できることを”を基本に、河川環境の向上とまちづくりに関する事業を展開。「市民の汚した川は市民の手できれいに再生しよう」と有志10人で会を発足し、毎月2回ボートで川の清掃を実施。かつて悪臭の漂う川だった新町川を再生させた。徳島市の“ひょうたん島”を一周する「ひょうたん島クルーズ」は今や徳島市の名物となっている。例年夏には「吉野川フェスティバル」、冬には「川からサンタがやってくる」などの川にまつわる各種イベントを主催。このほか、活動の起点となった新町川をはじめ、助任川や田宮川、吉野川河川敷の清掃、公園や歩道での花植えなど、年間を通じて川を中心とした多彩な活動を展開している。さらには、高知県の吉野川源流域での植樹・間伐活動や積極的な講演活動など、全国各地との連携にも力を注ぐ。2008年に新町川から鳴門を結ぶかつての巡航船「撫養航路」を遊覧船で復活させたほか、旧吉野川にも航路を順次拡大させている。30年以上活動が続けてきた理事長の中村英雄氏は、「まちづくりの主役は市民。きれいな川、きれいな街に人が集まる」と語る。

（小林なずな）